

「コウノトリ悠然と舞う ふるさと」をめざして

松井 敬代（豊岡市教育委員会文化振興課／主幹）

1. はじめに

自然的文化財という用語は今回初めて耳にしたが、これに含まれると想定されるものとして、文化財保護法で定義されている渓谷や海浜、山岳などの自然系の名勝や天然記念物、また、国立・国定自然公園、森林生態系保護地域、また世界自然遺産などがあげられよう。

これらを豊岡市にあてはめてみると、指定文化財では国指定の特別天然記念物コウノトリ、特別天然記念物オオサンショウウオ、天然記念物玄武洞、県指定の栎本の溶岩瘤、絹巻神社の暖地性原生林、名勝切浜の「はさかり岩」など、50件以上ある。これらのうちいくつかは山陰海岸国立公園内に、また山陰海岸ジオパークのジオエリアに含まれており、このほか国内希少野生動植物種の生息地等保護区である大岡アベサンショウウオ生息地保護区、ラムサール条約登録湿地として円山川下流域・周辺水田が指定されるなど、自然環境がとても豊かな地域である。まず、これらを育む豊岡の位置と地形の特徴を押さえておきたい。

2. 母なる川、円山川とともに生きる

豊岡市は、兵庫県北部に位置する人口8万5千人〔平成24年（2012）4月現在〕のまちである。平成17年（2005）4月の市町村合併によって、兵庫県内最大の面積を誇る市となり、県全体の8.3%を占めている。北は日本海に面し、南には中国山地の東端である標高1,074.4mの蘇武岳を頂き、市のほぼ中央には円山川が北流して日本海に注ぐ。市域面積697.66m²の79.3%を森林が占めており、山岳部は氷ノ山後山那岐山国定公園に、海岸部は山陰海岸国立公園に指定され、多様な四季を織りなす自然環境に恵まれている。

豊岡市の中央を流れる円山川は、その河口から10km遡っても高低差がほとんどない特異な河川である。中下流域では、河川勾配が1/9,000とほぼ水平状態であるため、風のない日には川面が鏡のように静かで、潮の満ち干や海から吹き上げてくる風などで、上流に向かって水が逆流することも毎日のように見られる。したがって

円山川上流から勢いよく流れてきた水は、豊岡盆地に入ってスピードを極端に落とす。河口から6.5km、ちょうど玄武洞が位置する付近では両側の山が迫り、ボトルネック状の地形を呈していることから、大量にたまつた水が日本海に吐き出されずに豊岡盆地に滞留して溢れ、たびたびのように水害を起こしてきた。

未だ記憶に新しい平成16年（2004）10月の台風23号では円山川本流だけではなく、その支流である出石川、稻葉川、太田川等も氾濫し、堤防の決壊による増水で死者を出すなどその流域に甚大な被害があった。その直後から始められた災害復興事業は、将来にわたり最小限の被害で食い止められるよう大規模な工事がおこなわれており、開始から6年以上経った現在でもまだ終わっていない。

有史以来、円山川の氾濫とのたたかいは、流域住民の苦悩の歴史そのものであった。近くでは明治43年（1910）から始まり、昭和9年（1934）まで25年間も続いた円山川大改修、古くは江戸後期に出石藩が行った出石川合流部での河畔林植林と大保恵堤の築造など、円山川の河川改修は幾度も繰り返し行われてきている。



図-1. 来日山からみた豊岡盆地
(写真左下に玄武洞が位置する。)

(1) 出石川のオオサンショウウオ

台風23号で被害の大きかった出石川では、農業用水確保のために築かれたいくつかの井堰直下で、遡上できなくなった特別天然記念物オオサンショウウオが多数発見された。出石川復旧工事の施工にあたった兵庫県豊岡土木事務所では、工事着工前にそれらを一時避難させ、工事終了後、生息環境が整ったうえで元の場所に戻すこととした。当時事業を直轄していた災害復興事業室では、研究者の指導のもと、区域内の小学生を対象にした「出石川ジュニア・リバーズ」を立ち上げ、オオサンショウウオの保護を主眼にしながら、体験学習として川やその周辺の生き物観察、環境教育などを実践した。「僕らの水辺再発見マップ」という環境マップを作成した高橋小学校は、国土交通省が設けた川の日制定10周年記念優秀賞を受け、体験学習発表会を開催する機会も与えられた。そのほか、オオサンショウウオを題材にした展示会や学習会が市内外で開催された。

災害復興事業室は、保護したオオサンショウウオにマイクロチップを埋め込み、放流後も個体追跡調査と共に環境生息調査も継続して行っている。災害復旧工事での捕獲数は500頭を超える、事業が完了して役目を終えた災害復興事業室が持っていたデータは、現在、豊岡市教育委員会にも引き継がれ、その後の生息調査の基礎資料としている。

出石川河川改良復旧工事には、オオサンショウウオも住める環境対策工法が積極的に取り入れられている。一例を挙げると、護岸に巣穴ブロックを設け、部分的に巨石を積み上げてオオサンショウウオが営巣しやすい環境とし、また井堰を緩傾斜階段式落差工に変更し、遡上できない落差を解消して一部には魚道を設けるなどの改良がなされた。このように、行政と教育の両面でオオサンショウウオを守っていく体制が整えられた意義は大きい。

(2) コウノトリとの約束

豊岡市では、めざすまちの将来像を「コウノトリ悠然と舞う ふるさと」とし、それを実現するために、①安全と安心を築く②地域経済を元気にする③人と文化を育てるために、コウノトリを核とした先進的な取組を豊岡モデルとして世界に発信することを基本構想のテーマに掲げている。

ア) コウノトリ野生復帰

コウノトリは、日本では一度絶滅した鳥である。かつて円山川流域には多くのコウノトリが生息し、湿潤な土地を多く持つ豊岡盆地は、最後まで野生のコウノトリが営巣していた場所でもある。豊岡市でのコウノトリ野生

復帰の取り組みを紹介する有名な白黒のポスターには、ひとりの女性が5頭の但馬牛を水浴びさせる場面と、同じ場所で12羽のコウノトリが餌を探している様子とが映っている。昭和35年（1960）の円山川での一場面を切り取ったものだ。同じように「つるボイ」といって、田んぼの稲を踏み荒らすコウノトリに危害を与える追い払う農事や、コウノトリの営巣する松の木のそばに茶屋を設け、瑞鳥として絵葉書の題材にしてきたなど、コウノトリが日常風景の中に溶け込んでいた。

ところが、その後行われた圃場整備や農薬散布などによって生息環境が悪化し、見る間に数を減らして絶滅の危機に直面してしまった。昭和40年（1965）、絶滅の危機に瀕していたコウノトリを救う最後の手段として、野生のコウノトリを捕獲して人工飼育する道を選び、飼育下で繁殖を何度も試みるがうまくいかず、昭和46年（1971）には保護した野生個体がすべて死んで、野生のコウノトリはついに絶滅した。保護増殖センターで行っていた人工飼育もうまくいかず、孵化しない年月が20年続いたが、昭和60年（1985）にハバロフスクから贈られてきた6羽から孵化したヒナから25年目にしてようやく繁殖に成功し、以後増殖活動が軌道に乗って毎年ヒナが育って飼育数が増えていった。

100羽を超えたところで、かつてひとの都合で捕獲して繁殖させるという手段をとり彼らの自由を奪った代わりに、必ずもう一度空を悠然と舞わせるというコウノトリとの約束を果たすため、平成17年（2005）に放鳥に踏み切った。放鳥したコウノトリのペアから生まれたヒナが初めて巣立つまでに、実に46年もの歳月が必要だった。現在では、野外で巣立った鳥を含め60羽のコウノトリが大空を舞っている。

イ) コウノトリとの共生

コウノトリが野外で生きていくためには、周辺環境を整えなければならない。そこで豊岡市では、コウノトリも住める豊かな環境をつくるために、「豊岡エコバレー」を目指して、豊かな森をつくり、多様な水辺を再生してネットワークさせ、農業をしながら生き物を育むことで、「自然環境」の保存・再生・創造を目指して進めている。間伐材をペレットに加工し、バイオマス燃料として利用する、円山川水系自然再生・湿地再生をする市民団体や地域団体を育てネットワーク化して情報共有する、冬季湛水田を増やし小中学生に田んぼの生きもの調査を実践するなど、様々な取組を進めている。

一方、ふるさとを見つめ直し学び楽しみ、楽しみながら省資源型の暮らしを再現し、コウノトリを支える豊岡の取り組み・歴史文化を紹介し、豊岡産品のブランド力



図-2. コウノトリの郷公園

を高めることによって、「文化環境」の保存・再生・創造も実践していこうとしている。生きもの共生の日を設け、子どもを自然に親しませる子どもの野生復帰大作戦、昔ながらの建築法を学ぶ施設豊岡エコハウス、東京都心に開店した豊岡市アンテナショップ、都心からの観光客を呼び込むためのツールのひとつコウノトリツーリズムや放棄水田をコウノトリが餌場にするビオトープに変身させた田結地区のガイド、案ガールズ、豊岡産品のブランド力を高めるコウノトリの舞・コウノトリ育むお米など、こちらも多様な取組を展開されている。

自然環境と文化環境を両輪に据えて、環境と経済が共生する『小さな世界都市』となることを目標に歩んでいこうとしている。まさに人とコウノトリとの共生をめざす試みである。

様々な努力と成果が認められて平成24年(2012)7月、「円山川下流域・周辺水田」560haが国際的に重要な湿地として、ラムサール条約登録湿地に認定されることになった。水田が湿地登録の対象になったのは、初めてのことである。「円山川下流域・周辺水田」では絶滅危惧種のコウノトリの生息環境を守るため、水田では環境創造型農業である「コウノトリ育む農法」に取り組む農家があり、環境市民団体が管理するコウノトリの繁殖する人口湿地「ハチゴロウの戸島湿地」など、様々なタイプの湿地が存在している。エリア内にはコウノトリ以外にも絶滅危惧種のヒメシロアザザ、在来種のオオアカウキクサなどの水生植物やメダカ・イトヨなどの魚類、ヒヌマイトトンボなどの昆虫類などが生息しており、湿地が多様な生物相を支えている。

3. 玄武洞と山陰海岸ジオパーク

(1) 玄武洞とその整備

豊岡市周辺では江戸時代から玄武岩を採石し、目前を流れる円山川の舟運で、家の礎石や庭石、石垣などに利用してきた。身近には、どの家庭にも漬物石として玄武

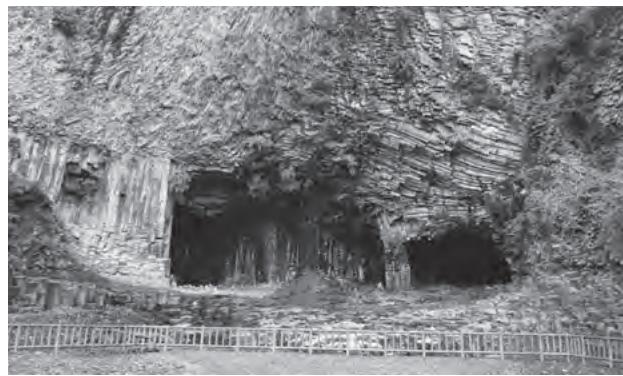


図-3. 整備された玄武洞

岩を1個保有しているとも言われている。また、平安時代から二見浦として歌に詠まれるほど風光明媚な場所でもあった。江戸幕府の儒学者であった柴野栗山が、湯島(現在の城崎温泉)に向かう道中、ここに立ち寄り「玄武洞」と命名したといわれている。

明治44年(1911)には「玄武洞保勝会」が発足して採石を中止し、美しい柱状節理を見せる名勝地にうまれかわった。前年対岸に鉄道が敷設され玄武洞駅ができることによって、隣駅であった城崎温泉からの観光客が押し寄せ、一大観光地に成長していった。また、大正8年(1919)に制定された史蹟名勝天然紀念物保存法に従って全国で行われた史蹟名勝天然紀念物調査によってその価値が認められると、さらに観光客が増加していった。

大正14年(1925)に起きた北但大震災によって、玄武洞が崩落し洞が埋まってしまったが、整備のため同じく壊滅的な被害があった城崎温泉街の中央を流れる大谿川の改修に再利用して川護岸とした。この護岸は弓形橋と共に、城崎温泉の景観を形作っている。その後の度重なる小崩落や経年変化によって少しづつ節理が埋まってきたため、玄武洞と青龍洞を平成16年(2004)度から6年かけて文化庁の国庫補助事業で整備を実施した。整備は、できるだけ柱状節理を見せるように埋まっている個所を掘り起こし、景観を遮る樹木や草木類の除去を中心実施し、並行して指定区域外の白虎洞、南北朱雀洞も国交省の補助を受けて整備した。

(2) 山陰海岸ジオパークの活用

玄武洞の整備途上で、山陰海岸国立公園を核に鳥取県・兵庫県・京都府の1府2県で世界ジオパークの加盟認定を目指そうという機運があがった。山陰海岸国立公園は、砂丘や洞門、洞窟、奇岩などの岩石海岸のほか、足跡化石やポットホール(甌穴)などがあり、まさに「地形・地質の博物館」ともいわれている。兵庫県内では、国指定天然記念物「玄武洞」「鎧の袖」、名勝「香住海岸」、名勝及び天然記念物「但馬御火浦」をはじめ、多数の県

指定・市町指定文化財が一部となっている。

平成22年（2010）、晴れて世界ジオパークへ加盟認定された山陰海岸ジオパークには、豊岡市では山陰海岸国立公園内の玄武洞、日和山海岸、竹野海岸などのほか、内陸部の神鍋高原、円山川下流域の城崎温泉やハチゴロウの戸島湿地なども入れられた。行政と観光協会を始めとする民間団体、また市民団体が主体となってその保護や周知、ジオツーリズムを展開している。

4. コウノトリ悠然と舞うふるさとの姿とは

文化財保護法でいう天然記念物は、動物、植物、地質・鉱物をいい、それぞれ種や個体を対象にした保護が第一義である。豊岡市では現在、国2件、県12件、市21件の計35件の天然記念物が指定されており、自然系の名勝を併せると50件以上になる。それらを保護し、保全し、周知や公開などで活用を図っている。

一方、コウノトリとの共生やラムサール条約登録湿地の認定によって、自然環境保全や生物多様性への取り組み、環境経済戦略の推進などが行われている。ジオパークでは、日本海の岩礁が良好な漁場になり松葉ガニと呼ばれているズワイガニや紅ズワイガニの漁、火成活動の影響を受けた温泉資源である城崎温泉、地形を利用した高原リゾート神鍋山など人間の営みと深く結び付いて、それらの保護も大切にしながら、ネットワークやツーリズム、またそれに関わるさまざまな取り組みを総合的に行っている。

文化庁の指針として、平成19年（2007）度に「歴史文化基本構想」や平成20年（2008）度の「地域における歴史的風致の維持及び向上に関する法律」など、地域における文化財の総合的な取り組みを推進していくこうという方向性が示された。豊岡市でもコウノトリとラムサール湿地、ジオパークなどへの取り組みが先行しているように思われるが、遅ればせながら豊岡市独自の歴史文化基本構想の策定を目指すことになった。兵庫県下で一番広い面積を有し、多様な自然環境、文化環境を育んできた地域として、まず、文化財悉皆調査・詳細調査を実施して分析し、周辺環境も含めて総合的に把握して、豊岡市における空間的・時間的つながりを明確にしていきたい。そのなかから、今までと違った豊岡市像を見いだせる可能性にも期待したい。

振り返ってみるとコウノトリとの共生もラムサール登録湿地やジオパークなどの先行する取り組みも、閉塞感がある地方ではありがちなことだが、どちらかというと行政主導で進めてきている。今はまだ自立が弱いが、民間団体や市民団体などと、ともに考え、取り組み、まち

づくりに活かしていかなければ本物の観光振興や地域の活性化は図られないと考えている。

実は、豊岡市には2枚の観光鳥瞰図が知られている。1枚は「躍進の城崎温泉観光圖」で、昭和10年（1935）に描かれたものである。北但大震災から復興した城崎温泉に観光客を呼び戻すため、温泉の湯けむりがそこかしこに立ちのぼり、水上飛行場やスキー場で遊ぶ人々、玄武洞、東山公園などの観光地が強調して描かれている。もう1枚は「豊岡市鳥瞰図」で、昭和37年（1962）頃の豊岡市街地を中心に描かれたものである。絵中にはコウノトリの営巣地が描かれ、そのころ新設された病院や公共施設が、整然と配された街区とともに描かれている。どちらも今後も町が発展していくという希望をこめて描かれたものである。

また、北但大震災直後に、まちのシンボルとして最初に築かれたRC構造の豊岡町役場（現在の豊岡市役所本庁舎）を壊して新たな市庁舎を建造するのではなく、わざわざ曳家をして復興のシンボルとして残すことを選択した。しかも、のちに豊岡町から豊岡市になった時に増築した木造の3階も復元した。長い間に街の景観になっているからという理由からである。これはひとつの方向性を示唆しているといえよう。

豊岡市はめざすまちの将来像を「コウノトリ悠然と舞う ふるさと」とし、自然や歴史、伝統や文化を大切にし、そこから地域への深い愛着を感じ、夢と希望を描きながら元気と賑わいがあふれるまちをめざしている。そして、地方の小さな都市（まち）であっても、世界の人々から尊敬され、尊重される『小さな世界都市』となることを目標にしている。その素材は原石のようにたくさんころがっている。あとはそれを総合的に把握し、どう活かすかにかかっていると言えよう。

【参考文献等】

- 1) 『豊岡市史（上巻）』1991.3 豊岡市
- 2) 『豊岡市史（下巻）』1993.3 豊岡市
- 3) 『豊岡市総合計画（前期基本計画）』2007.3 豊岡市
- 4) 『豊岡市総合計画（後期基本計画）』2012.3 豊岡市
- 5) 『要覧』2004.3 豊岡市立コウノトリ文化館
- 6) 『平成23年度要覧』兵庫県立コウノトリの郷公園
- 7) 『コウノトリ再び空へ』2006.1 神戸新聞総合出版センター
- 8) 鷺谷いずみ編『コウノトリの贈り物』2007.11 地人書館
- 9) 小野泰洋・久保嶋江実『コウノトリ、再び』2008.8 エクスナレッジ
- 10) 『天然記念物玄武洞保存整備事業報告書』2010.3 豊岡市